◎安心して学ぶ

①私たちが「安心して学ぶ」ために
②外国人児童生徒と教育

①私たちが「安心して学ぶ」ために

■金 順玉

1―「安心して学ぶ」とは
2―異質なものが見えているのでしょうか
3―みんな同じなら安心?―日本の教育
4―体験を通して感じていく―違いに好奇心
5―みんなが同じになることはありえない
6―葛藤している子供たち

1―「安心して学ぶ」とは

「安心して学ぶ」。この言葉はたとえば、外国籍の児童がありのままの自分で、ひけめを感じることもなく、過度に級友の目を意識したり恐れることなく学べる環境と、とりあえず定義できるかもしれません。日本で生まれ育った在日韓国・朝鮮人の児童の家庭にも、父祖伝来の食べ物や言葉、習慣が息づいています。それらはひけらかす必要もありませんが、隠す必要もないはずです。しかし現実にはどうでしょう。大部分の児童たちは本名を名のらず通名で通学しています。少数の本名宣言をした児童たちも、相当な覚悟と緊張感を強いられているのが現状です。

このことを、歴史的な解釈にもとづいて説明することもできます。強制連行、創氏改名にさかのぼって、差別の流れを跡づけることは可能でしょう。また、そうすべきだと考える人たちは少なくありません。しかし私としては、あくまでも自分の日常で見聞きした範囲の事がらで、話をすすめたいと思います。

2―異質なものが見えているのでしょうか

近所に住む親戚の娘の話から始めましょう。小学校四年の聡美は、ある日学校から帰るなり、「わたし、ニッポン人じゃないよね?」母親にかけよってたずねました。「けっして思いつめた表情ではなかったんだけど――」本名で税理士の登録をして働いている在日二世の母親が話してくれました。それは、担任の教師が発っした、おそらくは何気ない言葉だったのでしょう。掃除の見回りにやってきた教師は「だらしないぞ。おまえたち、日本人だろう。ニッポン人ならニッポン人らしく、しっかりしろ!」そう言って児童たちを叱咤したそうです。その言葉を聡美は、聞き流すことができなかったのです。

掃除に「ニッポン人」をもちだす必然性の是非はともかくとして、その教師は、受持ちに外国籍の児童がいることを、たまたま失念していたのでしょう。説明を求めれば、「うかつでした。これからは気をつけます」とそんな答えが返ってくるかもしれません。しかしこれは、出かかった言葉をのみ込めば、それで済むという問題ではありません。だからといって、「ニッポン人」という言葉は禁句にしようとか、教師が自主規制をするようになれば、これまた不幸なことです。

実は私も同様の失敗をしたことがあります。国際理解教育の講師として訪れたある小学校でのことです。二年生の教室で黒板に地図や国旗をはり、時間いっぱい韓国の文化や歴史について話をしました。授業が終わると、ひとりの少女が近づいてきました。そして、おずおずと手を差しだしました。「これ、わたしの国の国旗なの」。手のひらには、折り紙を切り貼りした紙片がのっていました。私はそれを手に取りました。「ブラジルから来たの?」微笑みながら話しかけようとして、はっとしました。この子はなにか口には出せない気持ちを、なんとか私に伝えようとしているのではないかと、そんな気がしたのです。

韓国・朝鮮人ばかりが外国人ではありません。この子もクラスで心細い思いをすることが、きっとあるでしょう。そこまで考えていれば授業中に、たとえば彼女に「ブラジルの話を聞かせてくれない?」と話しかけることだってできたはずです。そうすることが国際理解教育の講師の務めではなかったかと思いました。担任に外国籍の児童はいないか、聞いておきさえすればよかったのです。

3 みんな同じなら安心?—日本の教育

個人的に反省すべき点はそれとして、このときもうひとつ私なりに考えたことがあります。日本の教育現場では、児童たちの同質性が暗黙の了解といったものになっているのではないでしょうか。言い訳がましいですが、私もそうした体質が自分の一部になってしまっているのかもしれません。

私は日本で生まれ育ったわけではありませんので、あくまでもメディアを通して耳にしたことですが、一部の中学校における髪型やスカートの長さ、ソックスのワンポイントに至るまでの校則の強制は、ほとんど脅迫神経症を思わせる不可解さです。知り合いの在日で、三人の子供たちを幼稚園からインターナショナル・スクールに通わせている母親が、自分の公立学校での経験をもとに語ってくれました。「差別やいじめの理不尽さは、どうしても納得できないだけに、子供にとってつらいものです。それでも年齢が増せば、アイデンティティに悩む時期をへて、民族意識に目覚めたり、仕事や趣味の領域で独自の世界を創りあげることで、克服することは可能です。それより、みんな同じであることを期待されることのほうが、もっと我慢できませんでした」

みんなが同じであることが、「安心」と結びついているのが日本社会のような気がします。そう考えると「安心して学ぶ」というテーマ自体にも、衝突をさけたいという「ことなかれ主義」の響きが潜んでいるような…、などと言うと勘ぐりすぎでしょうか。冒頭で、この言葉を〈とりあえず定義できるかも〉と書いたのも、こうした意味からです。あえて言わせてもらえば、子供たちに必要なのは「安心」より、好奇心や向上心を目覚めさせる「刺激」ではないかと、皮肉めいた言葉をもらしたくなります。

4 体験を通して感じていく—違いに好奇心

もう少し違った角度から見てみましょう。

南区の中村小学校は、十数年前の差別事件をきっかけに、人権教育推進のモデル校となり、これまで熱心な取り組みが続けられてきました。その一環として特別クラブ「オリニ会」がつくられ、私がその講師になって五年になります。このクラブでは、遊びや料理をとおして韓国・朝鮮の伝統的な文化を紹介したり、紙芝居をつくったり、チャンゴという楽器の演奏などを行っています。在日の児童は希望すれば誰でも入れますが、日本人の児童は希望者が定員の倍近くになりますので、抽選で参加者を決めてもらっています（写真—

写真—1　中村小学校「オリニ会」の子供たち

1)。

「オリニ会」で韓国の生活や習慣について話すと、子供たちから「ヘンだなあ」といった反応が返ってくることがあります。日本人の児童にとってばかりでなく、在日の児童にも初耳といった話もあります。たとえば韓国では食事のとき、汁物やご飯は必ずスプーンを使って食べます。ハシを使うのはおかずを取るときだけです。こんな話をすると、子供たちは不思議そうな顔をします。「うちの弟はまだスプーンで食べてるけど、大人もスプーンを使うの?」

そんなとき私は、「だってそれが韓国の習慣なんだよ」とは答えません。それより次の機会に、いっしょに料理をすることにしました。家庭科室でわいわい騒いで準備をし、机のうえに料理を並べました。「韓国では食事のとき、お茶わんなどの食器を手で持ち上げると、行儀が悪いと言われるんだよ」と、いただきますを言うまえに説明しました。

「じゃあ、みそ汁はどうやって飲むの?」

ひとりが声をあげました。

「だからスプーンを使うんじゃないか」

だれかが答えました。

子供たちは生き生きとした好奇心をもっていますから、すぐに飛びついてくれます。恥ずかしがりやで、声は出さない子もスプーンを握っています。「ぼくはイヤだからね」そう言っているのが、在日の子供だったりします。「違和感があるからといって、ヘンだと決めつけたりしては駄目」と言葉で教えることもできます。それも大切なことだと思います。ですが、私はなるべく説明するのではなく、体験を通して感じ取ってもらいたいと思っています。

5 みんなが同じになることはありえない

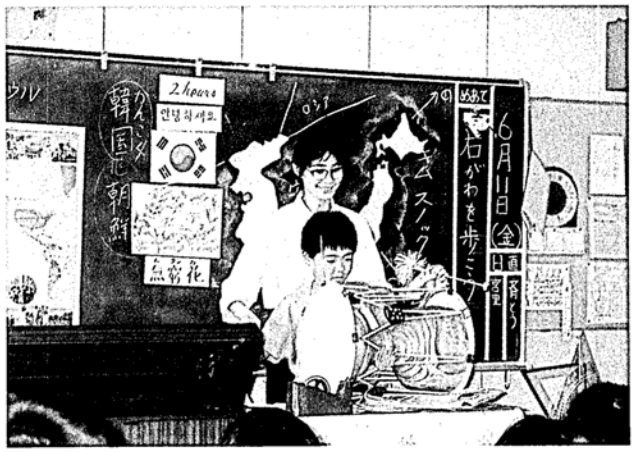
時間がかかりますし、思惑どおりに運ぶとは限りません。それでも、初めのうち戸惑ったり、無関心だった子供たちが、しだいに興味を示すようになると、うれしくなります。だからといって、私のやっていることが、どれだけの成果を上げているのかと問われると、私は考えこんでしまいます。

「オリニ会」に対する批判のひとつとして、「何年たっても、本名宣言をする児童が現れないではないか」というものがあります。私自身は、本名宣言をしたいという児童がいれば、できるかぎり励ましたいと思っていますが、こちらからことさら働きかけていこうとは考えていません。時期がきて、内面の必然性が高まらないかぎり、本人が納得できるとは思えないからです。

それでも、こうした批判に私なりに応えたいと考えて、クラブが終わった後、何人かの在日の児童に残ってもらい、質問をぶつけてみました。「本名と通名とどちらが好き?」という問いには、本名のほうが好きと答えた子供もいます。ですが「将来は本名で暮らしてみたい?」という質問には、そろって、そのつもりはないという返事でした。

その理由をたずねると、「なんか言われそうだから」と一人がうつむきました。「どういうこと言われそう?」と問い返すと、「な

写真ー2　潮田小学校「国際理解教室」「チャンゴ」の紹介



写真ー3　潮田小学校「国際理解教室」「チマチョゴリ」の紹介

んかねえ。おまえは韓国人だから帰れ、という感じ」ほかの子たちの答えも同じでした。いかにも予想どおりといった答えですが、私には意外でした。すこしショックだったと言ったほうがいいでしょう。この子たちは通名で通っていても、在日であることを隠してはいません。「オリニ会」でゲームをしながら本名を呼びあったりもします。しかしそれは、彼らが囲いの内と外という区別を、ひとりでに身につけているということなのかもしれません。

「この中村小に、そんなことを言う子がいると思う?」と私はかさねてたずねました。「いると思う」というのが、その答えでした。本名を名のりたくないという児童たちに、「人は一人ひとり違っているからこそ、すばらしいんだよ」などと語りかけても、彼らの現実に届かないような気がします。だからといって、自分で体験したわけでもないのに、「勇気をだして、やってごらん。きっと楽になれる。本当に心からの友達が見つかるから」などと話しかけることもできません。

特に低学年ですが、在日の児童たちは私にとてもなついてくれています。日本人の児童が甘えてくる態度とはちがいます。私が自分たちの味方だと信じきって寄ってくるのがわかります。その一方で、高学年の子供たちのなかには、「オリニ会」を負担に感じているのではないかと思える児童もいます。それどころか、「なんでおれが、そんなものに入らなければならないんだよ」と、はなから拒否反応を示す男子児童さえいました。話しかけようとすると、背を向けて逃げだします。その子の気持ちも理解できます。

日本で生まれ、日本で育ち、日本語を話しているのに、なぜ自分はほかの子たちのように日本人じゃないのか、そのことが理解できないのです。少しでもみんなと同じでありたいと願っているのに、なぜ自分は朝鮮人だとふれ回らなくてはならないのか、まったく迷惑な話だと思っているのでしょう。

彼らは安心して学びたいからこそ、目立ちたくないのです。みんなと同じであることでしか安心できないという現状があります。しかし、みんなが同じになり得るというのは幻想です。みんなが同じになろうとすればするほど、もっとささいな差異を見つけて、いじめや差別を引き起こしかねません。自分がいじめられないためには、いじめる側あるいは、いじめを傍観する側に立たざるを得なくなります。それだからといって「安心したい」という気持ちを否定することもできません。これでは堂々めぐりです。

6 葛藤している子供たち

ひとつだけ確かなことがあります。日本人のなかで暮らす在日の子供たちは、いやおうなくアイデンティティの危機にさらされます。葛藤をくぐり抜けることを、よぎなくされます。そこから逃げ出そうとするのは、それだけ強く意識しているからです。どういう決着のつけ方をするかは、人それぞれです。帰化して日本人になろうとするのか、民族意識に目覚めるのか。あるいは芸術や創造といった第三の道を探るのか。とにかくトンネルの中にいることを、まわりの大人には知っておいてほしいのです。それをしっかり認識し、注意深く子供たちを見守っていれば、そんなにひどい対応が行われることはないはずです。あとは子供たちに備わった知恵と、回復力を信じるべきではありませんか。

＜市立小学校外国人非常勤講師＞